

O-1 好酸球性鼻副鼻腔炎におけるデュピルマブ投与前後での遺伝子発現変化の検討

獨協医科大学 耳鼻咽喉・頭頸部外科学
常見泰弘, 柏木隆志, 中山次久

好酸球性鼻副鼻腔炎は、少量長期マクロライド療法に抵抗性を示し、手術治療をおこなっても再発を繰り返す難治性疾患である。好酸球性鼻副鼻腔炎は、Type2炎症による好酸球の鼻副鼻腔粘膜への浸潤を特徴とし、気道上皮細胞から放出される上皮由来サイトカインであるIL-33, IL-25, TSLPが、type 2 innate lymphoid cells (ILC2)を刺激することで、大量のIL-5, IL-13を産生し、鼻副鼻腔粘膜に好酸球を遊走させるとともに、IL-13は鼻茸の形成や杯細胞の過形成に関わるとされる。

従来、術後に再発を認めた症例においては、再手術を行うか全身性ステロイド投与を行うかの治療方針しか選択肢がなかったが、2020年にIL-4R α に対するモノクローナル抗体であるデュピルマブが本邦で適応となった。デュピルマブの臨床的な有効性に関する報告は国内外で多く報告されるようになってきたが、デュピルマブが鼻副鼻腔粘膜に対して、どのような病態修飾効果をもつのかに関しては、いまだ不明な点が多い。

今回、我々は細胞診用ブラシを用いて嗅裂部の擦過にて得られた検体からRNAを抽出し、RNAシーケンスを行うことで、デュピルマブ投与前後における遺伝子発現の変化を検討することとした。主成分分析を行うとデュピルマブ投与前後の遺伝子発現パターンは異なっており、発現変動遺伝子を検討すると、デュピルマブ投与によりCST1やPOSTNといった上皮細胞に発現し好酸球性鼻副鼻腔炎の病態に関わる遺伝子の発現低下が認められた。鼻副鼻腔粘膜のブラシ擦過による検体を用いた報告は少なく、過去の文献も含め考察し、報告する。

O-2 当科における放射線性顎骨壊死(ORNJ)のリスクファクター因子の検討

¹⁾ 獨協医科大学 口腔外科学, ²⁾ 上都賀総合病院歯科
口腔外科
藤原昂夢¹⁾, 八木沢就真¹⁾, 長谷川智則^{1,2)},
小宮山雄介¹⁾, 福本正知¹⁾, 和久井崇大¹⁾,
川又均¹⁾

【緒言】放射線性顎骨壊死(ORNJ)は頭頸部癌に対する放射線治療後の重篤な有害事象である。本研究ではORNJの発症頻度を下げることが目的に、当科で治療を行ったORNJ発症患者の臨床特性を分析した。

【患者と方法】当院にて2010年1月から2023年12月の間に頭頸部癌(口腔癌含む)に対して放射線治療を施行した531例のうち、当科で介入を行った481例を対象とした。電子カルテから対象患者の臨床特性に基づき検討を行った。

【結果】対象症例は男性361例、女性120例であり、平均年齢は65.9歳(27歳~92歳)であった。ORNJを発症した患者は27例(男性19例、女性8例)であり、平均年齢は73歳(57歳~90歳)であった。ORNJ発症症例27例中、照射線量は70Gyが14例(51.9%)、66Gyが6例(22.2%)、60Gyが3例(11.1%)、50Gyが3例(11.1%)、40Gyが1例(3.7%)であった。照射方法は27例中IMRTが3例(11.1%)、3次元原体照射(3D-CRT)が23例(85.25%)、電子線単独が1例(3.7%)であった。糖尿病患者は6例(22.2%)、喫煙歴は10例(37.0%)、飲酒歴は12例(44.4%)、口腔内清掃状態が不良は14例(51.9%)であった。口腔ケアの介入時期としては27例前例に照射前介入していた。治療後当科での口腔ケアが途絶えた症例が20例(74.1%)。継続して口腔ケアを行っていた患者が7例(25.9%)であった。RT前抜歯を施行した患者は6例(22.2%)、RT後抜歯を施行した患者は1例(3.7%)であった。ORNJ発症症例27例の腫瘍原発部位は中咽頭癌が13例(37.0%)、舌癌が4例(14.8%)、上咽頭癌、下咽頭癌が2例(7.4%)、上顎歯肉癌、頬粘膜癌、下顎歯肉癌、上顎洞癌、軟口蓋癌、顎下腺癌が1例(3.7%)であった。

【考察】本研究はORNJ発症症例のみの検討であるが、高線量照射、3D-CRT、治療後当科での口腔ケアが途絶えた患者、原発部位としての中咽頭癌患者にORNJが多く発症する傾向があった。今後、非発症群と発症群においてORNJ発症のリスクファクターの検討を行っていく。